卓球は四人まで

「ねえ、今日、スポーツセンターに行かないか。卓球コーナーの予約がとれたんだ。」

しゅんは、ひろし、さとし、あきらをさそった。

スポーツセンターの卓球コーナーは人気があって、なかなか予約がとれない。しゅんは家の人にたのんで、ようやく予約がとれた。

「昨日、お父さんとスポーツセンターにならんで、ようやく予約がとれたんだ。」

四人が卓球の話題でもり上がっていると、その話を聞いていたとおるが、

「ぼくも卓球をやりたいな。仲間に入れてくれないか。」

と言ってきた。

とおるは、卓球クラブに入っている大の卓球ずきとして有名だった。

でも、とおるとはとくべつ仲がよかったわけではないので、しゅんは、始めに声をかけた三人の顔を少しだけ見たあと、

「だめだめ。だってダブルスの試合をやるから、四人でないとだめなんだ。時間は一時間半と決まっているんだ。だから、四人まで。」

とことわった。

とおるは、何も言わず下を向いたまま、しゅんからはなれていった。

授業中、しゅんはさっきのことが気になって、ときどき、とおるの方を見ていた。

昨日、しゅんのグループが給食当番のとき、当番でもないのに牛乳運びを手伝ってくれたのは、とおるだったからだ。

（とおるに悪いことをしちゃったかな……。）

その日の帰り、教室の出口で、しゅんはとおるにかけより、声をかけた。

「とおるくん、さっきはごめんね。今日、きみもスポーツセンターに来ていいよ。」
しかし、とおるは小さな声で、
「卓球は四人までなんだろ。」
と言って帰ってしまった。
しゅんは、何とも言えない気持ちになった。

その後、四人で卓球をしたが、しゅんはあまり楽しくなかった。
卓球のと中でしゅんは、
「今日、ぼくはとおるくんにひどいことを言っちゃった。どうしよう。」
とみんなに相談した。すると、みんなも気になっていたようで、
「ぼくたちも、気になっていたんだ。」
と言った。

四人はとおるにあやまろうということになった。そして、次の日曜日にとおるをさそって、しゅんの家で五人で遊ぼうということになった。

次の日、四人は、早めに登校し、校門でとおるが来るのをどきどきしながら待った。

〈文部科学省　小学校道徳読み物資料集〉